

大学教育学会 課題研究活動報告書 (2022 年度)

提出日 2023 年 3 月 19 日

報告者 福留東土

課題研究テーマ	大学教育・経営人材の育成とプログラム開発に関する研究
代表者 (所属)	福留東土 (東京大学)
メンバー (所属)	福留東土 (東京大学) 井芹俊太郎 (神田外語大学) 河本達毅 (桐蔭横浜大学) 木村弘志 (一橋大学) 戸村理 (東北大学) 蝶慎一 (広島大学) 中世古貴彦 (九州産業大学) 水野貴子 (東京大学) 栗原郁太 (東京大学大学院)
担当理事	鳥居朋子 (立命館大学)
コメンテーター (所属)	寺崎昌男 (東京大学・立教大学・桜美林大学 (名誉))
実施した活動	<p>2022 年度は本課題研究の 2 年目に当たる。今年度は主に 4 つの活動を行った。</p> <p>① 学会大会ラウンドテーブル「大学教育・経営人材の育成を考える—教育プログラム設計の視点から—」</p> <p>6 月の学会大会では、「大学教育・経営人材の育成を考える—教育プログラム設計の視点から—」と題するラウンドテーブルを開催した。前年度までのラウンドテーブルや課題研究集会では、主に大学院教育を受けた修了生のスタンスに立った報告を多く行ってきたが、今年度は引き続きその視点に立った議論を継続すると同時に、教育する教員側の視点を重視することとした。以下の 4 つの報告を依頼し、報告に基づいて研究代表者がコメントを行うとともに、RT 参加者との間で議論を行った。</p> <p>戸村氏からは東北大学で実践されている人材育成プログラムについて報告いただいた。池田氏からは名古屋大学、名城大学、追手門学院大学で長年人材育成を実践されてきたご経験に立脚してプログラム設計のコンセプトや内容について議論いただいた。村澤氏からは広島大学における大学院教育の経験を元に、高等教育研究の組織の在り方に視野を広げた論点提起をいただいた。寺崎氏からは、桜美林大学、立教大学での経験を踏まえた大学職員像への期待とカリキュラムのあり方について議論いただいた。</p> <p>1. 戸村理 (東北大学) 「東北大学大学教育支援センターが提供するプログラムの事例」</p>

2. 池田輝政 (U&C ストラテジー)「三大学での専門人材育成を振返るー大学の戦略を推進するマネジメント人材の育成」
3. 村澤昌崇 (広島大学)「広島大学高等教育研究開発センターでの教育と課題」
4. 寺崎昌男 (立教大学・桜美林大学 (名誉))「大学職員像への期待とカリキュラムー体験からー」

**② 東京大学ホームカミングデー・修了生×現役教員トークセッション「大学経営・政策コース修了生と考える大学の DX」**

2016年以降、毎年、東京大学のホームカミングデーに開催しているトークセッションを今年度も開催した(2022年10月15日(土))。久しぶりの対面での開催となったが、前年度までに引き続きオンラインでも参加可能なハイフレックス形式で開催した。

コロナ禍以降、各大学でデジタル・トランスフォーメーションの動きが加速している状況に鑑み、今年度のセッションのタイトルは「大学経営・政策コース修了生と考える大学の DX」とした。大学の様々な現場で働いている大学経営・政策コース修了生・現役生が、大学の DX に関する自身や所属大学のこれまでの取り組み、現状の課題等について事例的な報告を行った。その後、今後の大学における DX の課題、何を考え、取り組んでいくべきか等について、コース教員を交えてディスカッションを行った。報告者は以下の4名である。

- ・大坪恭子氏 (2期生・早稲田大学 政治経済学術院事務長)
- ・下間康行氏 (博士課程在学中・一橋大学 理事・副学長・事務局長)
- ・廣中洋祐氏 (12期生・日本学術振興会 デジタル変革推進部 DX 推進組織ユニット)
- ・佐藤寛也氏 (13期生・博士課程在学中・東京大学 本部 DX 推進課 DX 推進チーム)

**③ 課題研究集会「大学教育・経営人材の育成・成長とそれを支える知の体系」**

2022年度課題研究集会では「大学教育・経営人材の育成・成長とそれを支える知の体系」と題して4つの報告を行い、立命館大学の中島英博会員にコメントを依頼した。

加藤氏からは筑波大学で実践されている履修証明プログラムの基盤をなすコンセプトを中心に報告いただいた。井芹氏からはこれまでの大学職員研究における人材育成を巡る議論の現状と課題を整理いただいた。松村氏からはイギリスの大学職員調査に基づき、職員の組織アイデンティティについて報告いただいた。清水氏からはアメリカにおける大学院高等教育プログラムの事例報告とそれらプログラムの構成と内容を支えるガイドラインの存在について報告いただいた。以上の報告を元に、中島氏からは、組織の全体像を理解する経営人材育成の必要性について論点提起いただいた。

	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 加藤毅（筑波大学）「近未来の大学経営と経営人材養成」</li> <li>2. 井芹俊太郎（神田外語大学）「大学職員研究のレビューからの知見—能力論に着目して」</li> <li>3. 松村彩子（名古屋大学）「大学教育・経営人材のアイデンティティ形成とキャリア—イギリス大学職員の組織アイデンティティ研究から」</li> <li>4. 清水彩子（東京大学）「アメリカ合衆国における高等教育管理者養成プログラムと質保証のためのガイドライン」</li> <li>5. コメント：中島英博（立命館大学）「組織の全体像を理解する経営人材育成への課題」</li> </ol> <p><b>④ 米国における高等教育プログラムに関する調査</b></p> <p>2023年3月に研究代表者が米国出張を行った際、ワシントンDCおよび近郊の複数の大学を訪問し、高等教育プログラム担当者へのインタビュー調査を行い、日本の現状を交えて、知見交流を行った。これまで文献や資料を通して検討を進めてきた事例と合わせ、米国における高等教育プログラムの実態理解を進めることができた。</p>
成果	<p>今年度の成果は主に以下の2点にまとめられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 主にラウンドテーブルの開催を通して、大学院プログラムや履修証明プログラムの実践経験の交換、およびその経験に基づく知見の交換を行ったことで、高等教育研究の成果をいかに教育実践に落とし込んでいくかについての知見が得られた。それによって、どのような構成、体系によって大学院や履修証明などの人材育成プログラムを構築していくべきかについての見通しを得ることができた。</li> <li>② ①とも関連しつつ、教育プログラム全体のコンセプトの構築に関わる知見が得られた。特に課題研究集会での一連の報告を通じて、組織、イノベーション、職員アイデンティティなどの概念を巡る知見、また米英の現状との国際比較の知見を得た。それによって、本課題研究における「大学教育・経営人材」の育成に関わる知見を広範化することができた。今後、これまで以上に広い見地に立って、専門職員人材の育成、およびそのためのプログラム構築に向けた議論を展開する見通しが得られた。</li> </ol>
残された課題	<p>本課題研究の2年間の活動の成果を踏まえ、最終年度となる2023年度の研究課題は大きく3点にわたって挙げられる。①「大学教育・経営人材」の育成に関わる概念に関する考察の深化、②大学院プログラムのあり方（カリキュラム構築、対象人材など）に関わる考察の深化、③大学院プログラムおよび教職員研修プログラムの国際比較を通じた日本の実践の相対化、の3点である。いずれも2年間の活動の中で取り上げ、徐々に成果を挙げつつあるものの、さらなる検討が必要な観点であると認識している。</p> <p>2023年6月の学会大会では、「大学教育・経営人材と育成プログラム」と題するラウンドテーブルを開催し、上記3つの観点に関する考察の深</p>

	<p>化を目指す。研究代表者がこれまでの成果と課題をまとめた発表を行い、それに対して、研究分担者のうち 4 氏からコメントと質問を提起するというスタイルで開催する予定である。課題研究メンバー、および当日参加者の間での相互理解を深めるとともに、課題の共有を図り、本課題研究全体の最終成果を見通した議論につなげたい。</p>
--	--